

令和３年度秋田県総合政策審議会第２回ふるさと定着回帰部会（議事録要旨）

１ 日時 令和３年８月４日（水）１５：００～１７：００

２ 場所 秋田県教育会館 ３０４・３０５ 会議室

３ 出席者（敬称略）

【ふるさと定着回帰部会委員】

須田 紘彬（株式会社あきた総研代表取締役）

能登 祐子（能代市自治会連合協議会会長）

加藤 未希（合同会社ＣＨＥＲＩＳＨ代表社員）

竹内 健二（一般社団法人ドチャベンジャーズ代表理事）

武石 一之（リコーＩＴソリューションズ株式会社経営企画本部経営管理部部長）

武田 成史（のしろ盛り上げ隊やらねすか☆４８代表）

照井 昌子（認定特定非営利活動法人環境あきた県民フォーラム理事）

山名 裕子（秋田大学教育文化学部学校教育課程教授）

【県】

久米 寿（あきた未来創造部次長）

水澤 里利（あきた未来創造部次長）

信田 真弓（あきた未来創造部あきた未来戦略課長）

近江 賢治（あきた未来創造部あきた未来戦略課政策監）

鈴木 雄輝（あきた未来創造部移住・定住促進課長）

六澤恵理子（あきた未来創造部次世代・女性活躍支援課長）

萩原 尚人（あきた未来創造部地域づくり推進課長）

小熊 新也（企画振興部デジタル政策推進課長）

高橋佐紀子（生活環境部温暖化対策課長）

４ 議事

（１）提言に向けての主な論点について

□事務局（信田あきた未来戦略課長）

委員が思い描く「人口減少問題を克服した姿」について、部会資料１により説明

本部会でのカーボンニュートラルの位置付けについて、部会資料２により説明

意見交換の論点について、部会資料３及び４により説明

●須田紘彬部会長

- ・ ただいまの事務局の説明について、質問、確認事項等はあるか。

(なし)

●須田紘彬部会長

- ・ ただいまの説明を受けて意見交換を行っていきたい。必要に応じて、事務局からも情報提供など発言してほしい。
- ・ 前回同様に、6つの分野があるので、1つ当たり15分程度と考えている。前回意見が出ていない分野について、重点的に意見交換したい。
- ・ いきなり意見を聞いても話しにくいと思うので、今回の出席に当たっての意気込みや、前回からの間で考えてみたことをざくばらんに伺いたい。名簿順で加藤委員、いかがか。

●加藤未希委員

- ・ 今回までの間で、人口減少問題についてゆっくり考えてみた。私は部会の中で、子育ての分野に一番近い委員であるため、子育てしやすい県のランキングで上位に入っていることを、人口減少問題を克服した姿としてイメージしている。一番が理想ではあるが、まずは上位に入っていることで、人口減少の状況も変わってくるのではないかと感じている。
- ・ 私がいるCHERISHに来てくれるお母さんたちは、転勤族の方も多いが、「秋田はすごく子育てしやすい場所だった」という話を聞くことがとても多いので、そういった点を秋田の魅力としてもっと発信できればいいと考えている。
- ・ 子育て支援の活動をしている団体にも、アレルギー、多胎児、発達障害など、様々な分野の団体があるが、困っている母親の存在が見えにくいため、県や市、いろいろな分野の方々と連携して支援に当たることができればいいと思っている。

●須田紘彬部会長

- ・ 病児保育や、シングルマザー向けの家事代行サービス等の子育て支援については、首都圏等から転勤して来られたママさんから「秋田はサービスが見えない」と聞くことがある。その辺りが改善されて、子育てのしやすさにつながればいいと思う。
- ・ 続いて竹内委員いかがか。

●竹内健二委員

- ・ 五城目町の廃校になった校舎をオフィスとして使っているが、子どもたちが夏休みに入り、外でビニール製のプールで遊んだり、神奈川からお忍びで来られていた世界的に有名な社会起業家と酷暑の中バーベキューをやったり、非常に夏休みらしい1か月になっ

ている。

- ・ 人口減少問題を克服した姿についての宿題をもらったが、やはり日本一、子どもが育つ秋田になればいいと思っている。
- ・ うちの子どもたちも、家のそばの川で泳いだり、週末は海に行って、私が釣りをしている間に泳ぎまくっていたり、本当に秋田県は環境として素晴らしいと感じている。
- ・ 今日の議論でも難しいことは語れないが、元移住者として、足下の視点からいろいろな話ができればと思っている。よろしくお願いします。

●須田紘彬部会長

- ・ 続いて武石委員お願いします。

●武石一之委員

- ・ コロナ禍を契機として、全世界的に働き方が大きく変わっていることが気になっている。この働き方改革が、秋田県にとっても、かなり移住・定住の可能性を大きく膨らましていると考えている。
- ・ ただし、首都圏を中心とした、いろんな世代の人と仕事をしていると、秋田県は魅力的な場所ではあるが、移住・定住には魅力を感じていないという話を多く聞く。理由としては、やはり遠いことが一番大きな問題であると思われる。この遠さに対して、施策・対策ができれば、移住・定住の可能性がより広がるのではないかとと思っている。
- ・ このような観点から、いろんな話ができればと思っているので、よろしくお願いします。

●須田紘彬部会長

- ・ 続いて武田委員お願いします。

●武田成史委員

- ・ ちょうどこの間の日曜日に、自分たちで企画した婚活イベントを開催した。最近はオンラインによる開催が多いが、外で集まって開催することができた。
- ・ 女性の申し込みが少なく、中止になる可能性があったが、開催日前日によくぎりぎりの3名、締め切り直前に2名、締め切りが過ぎてから1名の申し込みがあり、最終的には男女6対6で開催することができた。
- ・ 女性の申し込みがあるまで、独身の女性に参加しないか声をかけてみたものの、婚活疲れや、結婚にメリットが感じられないという女性が多かった。自分の仕事で十分に生活できるので、自分がやりたいことをやっていきたいという女性が多い。
- ・ 婚活イベントでは、無事に一組がカップルになったが、40代でも婚活が初めてという方もいて、意識がだいぶ遅いと改めて感じた。また、初めて参加する人も多かったので、サポートしながら進めたところ、皆さんに本当に喜んでいただけたようである。カップ

ルにならなくても連絡先の交換はできたので、今後に期待したい。

- ・ 自分の専門分野ではないが、若者定着について述べたい。自分は仕事柄、小学生や中学生の職場体験を受け入れることがあるが、最近は学校教育の中で地域のためにといった教育をしているからなのか、いずれ戻ってきたいという子どもたちが多く、喜ばしいことである。
- ・ 一方で、将来何をやりたいか聞くと、偶然ではあるが、みんな公務員だと言っていた。社長になって、お金持ちになりたくないか聞いても、全然なりたくない、普通に暮らしていけばいい、無理なく暮らせるぐらいがいいとのことで、考え方が昔とはだいぶ変わったと感じた。
- ・ 帰ってきたいと思っても、やはり一度県外に出てしまうとなかなか戻って来ることができなくなるので、小さいうちからふるさとの良さを伝えていくことが大事だと思っている。
- ・ 移住に関してもお話しする。商売をやっていると、秋田県は何もないとか、あまりいい印象を持ってもらえないという方が多いが、神奈川の平塚から来てくれたお客さんに、何回も秋田県のよさをアピールしたら、本当に移住してくれた。本当にたまたまだったのかもしれないが、秋田県民がみんな、秋田県は良いところだとアピールや声かけをするようになれば、もっと人が来てくれるのではないかと考えている。
- ・ また、親が子どもに対して、帰ってきてほしい、帰ってくることを少し考えてほしいと言えば、戻ってきてくれるのではないかと考えている。

●須田紘彬部会長

- ・ 直接声をかけて移住してもらうのはすごいと思う。次は照井委員お願いする。

●照井昌子委員

- ・ 先日、人口減少問題を克服した姿についてというお題をいただき、久々に真剣に考えた。
- ・ やはり夢を描いて、その夢に向かっていくイメージは大事だと思って提出した。
- ・ 先程、皆さんの人口減少問題を克服した姿についての意見を読み、一つ一つが私もそのとおりだと思うことばかりであった。やはり皆さんが思い描くイメージは、細かくは違っているけど、ほぼ同じだと考えたところである。

●須田紘彬部会長

- ・ 最後に山名委員お願いする。

●山名裕子委員

- ・ 先日、ある自治体の取組で、若年女性のＳＯＳをどう見るかというテーマで議論をした。望まない妊娠、子どもへの虐待などの問題を抱えながら、いろいろな制度や取組がある

にもかかわらず、そこにアクセスできない人たちの現状をどのように考えるかといったテーマであった。

- ・ 思っている以上に、何かの申請をすることや、助けてほしいと言うことが難しい人が、かなり多いという話題になった。
- ・ 例えば、DVや離婚調停中のサポートなどでも、それを受けている人はいいが、そこから漏れている人たちがたくさんいる中で、そのような人たちにどうすればふさと定着などを伝えることができるのか、考えさせられた。
- ・ 私も人口減少問題を克服した姿について、いろいろあるので難しいと思いながら考えたが、自らが望む働き方ができていることが重要だと考えた。
- ・ 何か大きく変わらないと、働くということに限界が来ているのではないかと思っているので、のんびりするために秋田県を訪れる人がいてもいいなと、別の価値観でアピールすることはできないのかなと思った。
- ・ 今日、いろいろとお話を伺いたい。よろしくお願いします。

●須田紘彬部会長

- ・ 私も人口減少問題を克服した姿について、いろいろと考えて、かなり抽象的な表現にはなったが、山名委員が言ったように、狭間の人も含めて誰一人取り残さないというSDGsの考え方は大事にしたいと思っている。
- ・ 大多数ももちろん大事であり、そこはボリュームゾーンになるところであるが、一方で、置いていかれる人がいないようにするための制度や取組をしていけばいいのではないかと考えている。
- ・ 皆さん、今日はよろしくお願いします。
- ・ 前回と同じ順番で意見交換を進めると、最初のテーマのボリュームが大きくなりそうなので、逆の順番で進めたいと思っている。部会資料3の後ろの方、分野6の「行政サービスの向上」から進める。
- ・ 前回は、デジタル・ガバメントの推進について、デジタルが苦手な人が取り残されないようにする必要がある、業務効率化のためには業務の見直しをする必要があるといった意見があり、県や市町村間の連絡調整や会議は必要だろうという意見があった。
- ・ 追加又は補足などの意見をいただければと思う。武石委員、御意見いかがか。

●武石一之委員

- ・ 今回の資料を見て、RPAやAIという言葉が出ているが、これらは必要になってくると考えている。
- ・ 行政サービスにおける業務の効率化を考える上で、ITは切っても切り離せないものである。キーワードとしてDXが出てくると思うが、Transformationであるので、どのようにして従前から大きく変えるのかということが大きなポイントだと思っている。

- ・ 今の子どもたちはＩＴに触れる機会が多いので、当たり前という感覚だと思うが、やはり中高年層以上の方たちのＩＴリテラシーをどのようにして高めるのが課題になると考えている。
- ・ ＩＴやＷｉ－Ｆｉ環境がいろいろな場所で当たり前になれば、例えば、首都圏に住む子どもと秋田の親御さんとが常時触れ合うことで、安心感が生まれるということがあると思うし、子どもが田舎の様子がよく分かることで、心配になって戻ってくることもあると思う。今後は、そういった環境はマストになると思っている。

●須田紘彬部会長

- ・ 認識の擦り合わせをしたいので、他の委員のためにＤＸの簡単な説明をおねがしたい。

●武石一之委員

- ・ 定義自体は詳しくないが、デジタルを活用して、大きく変革するということだと思う。
- ・ 前回の部会でＢＰＲという言葉を使ったが、ＢＰＲとTransformationは異なるものである。既存のビジネスモデルをベースとして変えていくＢＰＲとは異なり、Transformationは変革なので、がらっとゼロベースで考えるということも必要になってくると思う。

●須田紘彬部会長

- ・ おそらく、申請一つ一つが、実は取り組みにくいといったところにもつながると思うが、いかにして使う人が使いやすくデジタル化できるかというところで言うと、例えば既存の書式を単純にデータベースやフォームにすればいいという話でもない。様々なオンライン手続きなどのあり方自体が変わってくるという問題であると理解した。
- ・ 他に、皆さんの実体験の中で、こういう申請がデジタル化すればいいというような、身近な話でも構わないが、意見はないか。県・市町村間の協働推進に関する意見でもいい。
- ・ 武田委員は能代市で活動されていて、県や隣接している自治体ともう少し連携がとれたらいいと思うことはないか。

●武田成史委員

- ・ 比較的、能代山本地域は白神山地の世界遺産の関係で連携しており、ＰＲなども１市３町で集まって取り組んだりしているので、連携に問題はないと感じている。

●須田紘彬部会長

- ・ そのように、市町村単位ではなく地域文化圏のような形で、何か一つのテーマで市町村が連携するのもいいと思う。また、首都圏向けのイベント等を開催する際に、湯沢市と新庄市、にかほ市と酒田市のように、県境を越えた文化圏による連携もできればいいの

ではないかと思っている。

- ・ 分野6について、皆さんが考えていることはないか。加藤委員、子育ての申請などで、「もう少しこうなれば楽なのに」といったユーザー視点で御意見はないか。

●加藤委員

- ・ マル福やすこやか助成金などの子育てに関する手続きは、以前に比べると難しくなく、楽になったが、子育てに追われてバタバタしているうちに忘れてしまう方も多い。仕事の昼休憩でも、「提出今月末までだ」「郵送しなくては」「市役所に行かなくては」という会話が出ることも多く、もう少しデジタル化してもいいのではないかと思っている。

●須田紘彬部会長

- ・ 次に分野5に移る。「脱炭素化の実現を目指す地域社会の形成」である。前回は、イベント等の活用、子どもたちにも伝えられるようにすること、ペーパーレス、カーボンオフセットといった意見が出た。「持続可能な循環型社会の構築」についての意見が少なかったなので、この点についてもお考えがあれば意見をいただきたい。照井委員いかがか。

●照井委員

- ・ これまでも、イベント、セミナーなどを開催して地球温暖化防止県民運動の推進についてPRしてきたことは承知しているが、どうしても参加者は年齢層が高い方になりがちで、若い年齢の方は集まらない。どの年代層の方にも来ていただきたいし、関心がないという方に是非来てもらいたいのので、周知に当たっては、インターネットを活用するなど、今の時代に合わせて工夫するべきではないかと思う。
- ・ 次世代を担う年齢層への環境教育については、事務的な議論、意義、決まり事といったことを超えて、これからの自分たちの命、健康、生活などを守るために切実な問題であることを教えるべきである。「エコだから」程度の考えでは、知識はあっても行動にはなかなか結び付かないのではないか。
- ・ 今、国を挙げてクールチョイスという国民運動を進めているが、県民に行き渡っているように感じられないため、周知すべきではないか。
- ・ 「持続可能な循環型社会の構築」については、資源循環に取り組む事業者には利益が還元され、県内経済の活性化につながっていくような仕組みづくりが必要ではないか。やはり、取り組む事業者にメリットがなければなかなか進まないのではないか。

●須田紘彬部会長

- ・ 子どもに意識してほしいこと、日常的に活動してほしいこと、心がけてほしいことはあるか。また、大人であつたらどうか。

●照井委員

- ・ 大人と子どもの区別はないと思っている。本当に基本的なこと、例えば食べ物はできる範囲で残さず食べるといった食べ物を大事にしましょうという考え方や、水を大事にしましょうという考え方など、暮らしの中の基本的な、当たり前のことが重要だと思う。当たり前のことが当たり前ではなくなっている時代ではないかと思っている。

●須田紘彬部会長

- ・ 部会資料の「持続可能な循環型社会の構築」には、廃棄物の削減、下水道汚泥の有効利用などが記載されているが、照井委員の御意見も廃棄を少なくしていくということであり、必要なことだと思う。
- ・ 例えば、水がどれくらい使われているかといったビッグデータの活用も必要ではないかと思っている。他県の事例で、市町村での上水の利用量から、手洗いが推進されているか確認するといった取組が行われているようである。県民の生活様式が変わったことで、利用するものの量が増減するといった部分は、個々の消費者レベルではなくビッグデータを活用して確認すべきところであって、そのための市町村の取組を支援する必要があるのではないか。
- ・ 分野5について他に御意見はあるか。

●武田成史委員

- ・ 国を挙げた脱炭素の実現に向けた動きがあるが、人口減少下では必然的に二酸化炭素の排出量は減ってくるはずであり、それを更に減らすということか。

●須田紘彬部会長

- ・ 事務局からの説明を求めたいと思うが、日本では人口が減少しているものの、世界では増加している中で、各国に二酸化炭素の排出量の削減が割り当てられているため、日本でも取り組む必要があるという認識である。事務局から説明をお願いします。

□高橋温暖化対策課長

- ・ 部会長からお話があったとおり、地球温暖化対策は日本だけの問題ではなく、世界の最重要課題として相当前から取り組んで来たものである。
- ・ 日本では確かに二酸化炭素の排出量は減っているものの、目標は2050年にカーボンニュートラルを実現することである。排出量を削減しなければ、気温がどんどん上昇し、これにより生態系が破壊されることとなる。秋田の気温も、いずれは広島と同様になり、気候がかなり変わってしまうと予測されている。
- ・ 今ここで二酸化炭素の排出を食い止めて、減らしていく必要があるというところが共通認識であると考えているが、その理解が進んでいないのが実情であり、課題だと認識

している。照井委員からお話があったとおり、関心のある層にはある程度伝わっていると思うが、関心がない層にどのようにして伝えていくのか、そしてどのようにして行動に結びつけていくのかが重要な課題であると認識しているので、そのような観点からまた御意見をいただければと思う。

●須田紘彬部会長

- ・ 武田委員、いかがか。

●武田成史委員

- ・ 理解した。

●須田紘彬部会長

- ・ 他にこの分野で御質問、御意見があればお願いします。

●竹内健二委員

- ・ カーボンニュートラルについては前回も発言したが、経済の側面でも、大企業が 2050 年までにカーボンニュートラルに本気で取り組んで排出量を減らさないと、お金が集まらなくなるという話になっている。機関投資家がカーボンニュートラルに取り組む企業にしか投資をしないということである。
- ・ 大企業は、大問題だということで、政府に対してカーボンニュートラルの目標をもっと早く達成できるように指針を示すべきだとプレッシャーをかけている。
- ・ 大企業が製品やサービスを生み出すための全工程にカーボンニュートラルが問われるため、大企業と取引する中小企業は、カーボンニュートラルに取り組んでいないと取引を切られる可能性がある。これは秋田県に多い中小企業の皆さんにとっても死活問題である。
- ・ 部会資料を見ると、カーボンニュートラルへの挑戦をチャンスとしてとらえているように見受けられるが、チャレンジだけではなく、守りの施策が必要だと思う。
- ・ 私がお付き合いしている中小企業の方々は、生産過程でどの程度二酸化炭素を排出しているのか、電力会社に依頼して自ら調査をしているが、このように本気で取り組まないとまずいということを啓蒙する必要があると思う。
- ・ これは当部会で扱う提案ではないので、他の部会においてこのテーマで議論していただきたいと思う。
- ・ もう一つ別の話をする。ある企業と連携して五城目町で里山を購入し、テーマパークにしようと取組を始めたが、活動資金がなく、試行錯誤している。県の農山村振興課が「魅力ある里づくり」に補助金を出しているが、年間 2、3 件しかないので、10 件程度に枠を広げることはできないだろうか。

- ・ 山の魅力、自然環境の魅力を感じるため、環境教育も含めて、私はそこに漆の木を植えた。漆の木は50年程度をかけて育つので、大きくなる頃に私はこの世にいないかもしれないが、このように「次世代のために」という思いを持った若い経営者は結構いる。そういった方々にもっとチャンスを与えていただきたいというのが、切実な願いである。
- ・ やりたいことはいっぱいあるが、手元のお金がないために進まない。森林贈与税の活用でも構わないので、思いを持った人の取組への支援を広げていただければ、民間レベルや足下レベルにおける自然教育や、カーボンニュートラルに関連する活動が広がってくるのではないかと考えている。

●須田紘彬部会長

- ・ 県内企業のカーボンオフセットのために、森林の保全を推進してもいいのではないかと。その元手もカーボンオフセットを利用しながら、手元の賃金や資金を使っていけばいいのではないかと思う。

●竹内健二委員

- ・ カーボンニュートラルは再エネという言葉が先に来ているようだが、その前に改めて省エネに取り組んだ方がいいのではないかと。自分たちの暮らしや工場において、しっかりと省エネができているのかということであり、きちんとアセスメントして、どの程度省エネできているのか、まだ省エネできる可能性がどの程度あるのかという確認が必要だと考えている。
- ・ 熱交換技術や機械の導入に対する補助金があってもいいのではないかと。
- ・ カーボンニュートラルは、雲をつかむような話に聞こえるので、もう少し手前のところから、今まで取り組んできた省エネの検証も必要なのではないかという考えである。

●須田紘彬部会長

- ・ 今日のように暑い日は、業務効率とのバランス等から、冷房を何度に設定するのが適切かというところでも、アセスメントをして、取ったデータをきちんと事実として把握していくといった仕組みづくりが必要かもしれない。
- ・ 次に進ませていただく。分野4「変革する時代に対応した地域社会の構築」である。多様な主体がまちづくりに参加するためにという観点での意見がなかったが、どのようにして集客し、興味がない人に啓蒙するかという点では、カーボンニュートラルの分野と共通の議題ではないかと思っている。
- ・ カーボンニュートラルとの共通点に関して言うと、日本の規模や自分たちが住んでいる地域の規模で考えると、カーボンニュートラルに取り組む意義が見いだせない上、何かに取り組むことでお金がかかり、結局は何がメリットなのか分からないという話になりがちなので、地球規模など、視野を国際的に広げる必要があると思っていた。

- ・ 多様性に満ちた社会づくりについても、外国との接点を取り入れた方がいいと思っている。高校生等の学生に海外留学をさせるなど、国際交流にもう少し力を入れてもいいのではないかな。
- ・ 秋田県のパスポート取得率は全国の中でも低いので、そこを高め、海外に出ることによって、秋田という地域を世界中に知ってもらえばいいのではないかなと思う。海外で交流の機会があれば、自分は日本の中でも秋田から来たということを伝えてもらい、インバウンドにつなげていくといった活動も必要と思う。
- ・ 秋田県は在住外国人の数も少ないが、増やしていくためには、外国人にとっての住みやすさを向上しなければならない。住みやすさは言葉だけの問題ではなく、手続きの申請のしやすさや、制度の使いやすさなども向上する必要があると思っている。
- ・ 分野4について皆さんから御意見をいただきたい。山名委員いかがか。

●山名裕子委員

- ・ 部会長と同じで、海外に出ることや、海外の人に秋田に来ていただくことは重要だと思う。海外の人から見ると北海道、東京、大阪、沖縄は知っていても、秋田のことは知っているのか、日本の中での秋田の知名度はどれくらいあるのかといった、外から見た秋田のよさという観点も必要ではないかなと思った。
- ・ 県から依頼のあった「人口減少問題を克服した姿」を考えた時も思ったことであるが、今までの価値観の枠組みを大きく変えないと難しいことが多いと思う。どう変えたらいいのかは私自身も答えは出ていない。
- ・ 県民がそれを望んでいるのかどうか、望まなくてもそうしなければならない場合の発信はどうするのかを考えなければならない。
- ・ 偏見ではあるが、田舎の方が昔ながらの価値観があって、住みにくい、暮らしにくい、母親が働くこと自体を認めない姑が多いということがあると思う。そのような価値観が変わるのには時間がかかるが、それでも価値観の変革を進めないと、地域が立ち行かなくなるのではないかなと思っている。具体的な話ではないが。

●須田紘彬部会長

- ・ 差別といった観点では、どのような取組、施策、事業があればいいと思うか。

●山名裕子委員

- ・ まずは知ることである。差別を受けている人は身近にたくさんいるにも関わらず、そのような人がいること自体、目を向けないと分からないので、普段の生活の中では見えてこない。自分に関わってくる時に初めて「あれ」と思って、その「あれ」が差別につながる可能性が多く、難しいところだと思う。
- ・ 知るためには、やはり教育が重要であると思う。小さいときからの教育により、本当に

多様な人がいるということを知ることが重要であると思う。

●須田紘彬部会長

- ・ 啓蒙活動などにより、興味がない人にどのようにして関心を持ってもらうかということになると思うので、ある程度少数派の人が声を上げやすいような取組や支援が必要ではないかと思う。
- ・ 私自身、NAOのたまごという障害を持っている人を理解してもらうための活動をしているNPOに理事として参加している。私が主に取り組んでいる活動は、車椅子で街歩き体験をしてもらうというものであるが、ささいな段差でも怖いとか、バリアフリーとされているトイレで旋回ができなくて使えないとか、実際に体験してみて初めて分かることがたくさんある。そういった活動に対しての支援があってもいいのではないか。
- ・ 少数派の人が声を上げやすいことは、非常に重要であると思っている。少数派の人が隠れてしまうという話の一例であるが、一時期、秋田には車椅子の人があまりいないと言われていた。しかし、それは車椅子の人がどこに行けばいいのか分からないため、外出を控えていたというのが現実である。
- ・ まずは少数派の人たちが社会に出やすい取組や環境づくりを行う必要があるが、社会に出てくることで新たに課題が現れてくると思うので、二段階での対応が必要になると思っている。
- ・ 分野4について御意見はないか。SDGsに関しての意見でも構わない。

●武石一之委員

- ・ 私が勤めているリコーグループの中では、SDGsは既に当たり前の話になっている。子どもたちの将来を考えるとSDGsは当たり前の目標であるので、県民、民間企業など、すべてに対して計画を策定させるぐらいのことをやってもいいのではないかと考えている。
- ・ 先程、価値観の違いについての話があったが、住んでいるところによって価値観の違いや偏見などが生まれることはあり得る話であるため、小さいときからアンコンシャス・バイアス（注：無意識の思い込み）を知る教育が必要になると思っている。

●須田紘彬部会長

- ・ 人はかなり偏見を持つということから知ってもらう必要がある。自分は偏見を持っていないという人が、実は一番強く偏見を持っているということがある。
- ・ 場合によっては偏見も一つの意見なので、認め合わないとは多様ではないという、矛盾をはらんでいるのが難しいところだと思う。山名委員、そのあたりはどのように考えたらいいか。

●山名裕子委員

- ・ 全体論としては、多分みんな同じという話になるが、自分に関わってきたり、自分が主語になって発信するときに初めて、こんな考えを持った自分がいたと気づくことがある。普段は意識してなくても、ちょっとしたことで偏見の思いが出てくる瞬間がたくさんあると思うが、それをどのようにして見出して、解消につなげていくのか考えなくてはいけない。
- ・ 余裕がなくて、普通の生活をするのが精一杯という人に、将来や次世代のことは大事であるということを、どうすれば伝えることができるのかと問われると思う。自分の生活が直結している問題であるが、そうは思わない、思えないというところがあると思う。

●須田紘彬部会長

- ・ 今の生活がままならない人の場合、どう見せるのかという啓蒙と、生活安定のための施策と、どちらを先に行うべきかという判断は必要かもしれない。
- ・ 分野4について、御意見、御感想等いかがか。

●武田成史委員

- ・ 将来にわたり持続可能でコンパクトなまちづくりについて意見を述べたい。「人口減少問題を克服した姿」について、事業承継が進んで30～40代の経営者が増えることと書いたが、やはり街中では人口減少で後継者がいないため、辞めるお店が増えてきており、秋田県内全体を見ても、中心市街地はシャッター街になっている。
- ・ 私がいる能代でも、ある企業が郊外に建設中であるが、人口が減っている中で更に街が広がっている。コンパクトな街をつくっていかねばならないのに、広がっていくことで、カーボンニュートラルに逆行して二酸化炭素が増えたり、高齢者の増加に伴って買い物弱者が増えたり、いろいろな課題が増えてくると感じている。
- ・ 街の中心で街を守っている人たちのために、若い人たちにもう1回積極的に街中に入って商いをやってもらう必要がある。そのような若者が増えないと、その地域を守る人がいなくなり、これから大変な時代になってくるという思いがある。

●須田紘彬部会長

- ・ 具体的に必要な施策はないか。事業承継は様々な支援や補助ができると思うが、その他についてはイメージできなかったもので、皆で考えたい。

●武田成史委員

- ・ 秋田には伝統工芸の技術があるが、そのような技術は守る必要があると思う。生活できるだけの商売につながるかは分からないが、メイド・イン・ジャパン、メイド・イン・秋田を守らなければならないのではないかな。

●須田紘彬部会長

- ・ 今まで職人技でしか作れなかった物であっても、モーション・キャプチャ等の今のデジタル技術を使って、職人技を保存することはできるのではないだろうか。経済的にペイするのか、どのくらいお金がかかるのかは分からないが、技術を保存する意味はあるのではないか。
- ・ 分野4について意見はいかがか。多様性の部分、多様な主体がまちづくりに参画するための取組、集落における課題解決のICT化やAI化についていかがか。

●武石一之委員

- ・ 若者の移住・定住はハードルが高いと思っているが、例えばICTを活用した取組として、秋田県内の地域活動に県外から参加することは、今後は当たり前にはできないかと思っている。
- ・ インターネットに常時接続できる環境さえ整えば、県外に出た人たちが、常に田舎の様子を確認でき、興味も湧いてきて、「ちょっと帰ってみようかな」という志向に変わっていくことはありえるのではないか。

●須田紘彬部会長

- ・ 最近、プロボノ活動（注：社会人が自らの専門知識や技能を生かして参加する社会貢献活動）というものがあるが、これを労働力としてだけ見てしまうと心が離れてしまうので、やりがいや意義をいかにして考えてもらうのかということが必要だと思っている。
- ・ 県外からの地域活動への参加は、コロナ禍の今の時代だから推進しやすい面があると思う。
- ・ 次に進ませていただく。分野3の「女性と若者が活躍できる社会の実現」について御意見をいただきたい。前回は、男女共同参画に向けての基盤整備、女性活躍推進や未来を切り拓く若者の支援について御意見をいただいた。可能であれば、ニートやフリーターの方についてのコンサルティングの進め方や、チャレンジ精神を持った若者を増やすための取組についても、御意見をお聞きしたい。

●竹内健二委員

- ・ 地域おこし協力隊の活動をもっと広げていくべきだと思っており、今、五城目町ではたった1名であるが、これを30名くらいに増やしたいと思っている。
- ・ 自治体を中心となって地域おこし協力隊を募集するのではなく、民間が中心となって広く募集するのもいいのではないか。弊社では教育を中心として、教育フリースタイル協力隊と銘打って募集をかけているが、そんなに募集があるわけではない。
- ・ 県を挙げて、各自治体それぞれ20名程度の大規模な地域おこし協力隊をやっていくと

いうのは、無謀なようではあるが発想としてはありだと思っている。地域に関心を持って、「何かここでできるのではないか」と期待感を持って地域に入ってきて、地域おこし協力隊の期間が終わっても残っている方も多い。

- ・ 地域おこし協力隊は国が費用を負担してくれるので、地域の民間企業が活用し、自治体がそれを支援する、あるいは民間と自治体と一緒にチャレンジするといった仕組みづくりを県主導で取り組んではいかがか。地域に存在する、面白そうなことに対して感度の高い企業と連携するというやり方もいいのではないか。

●須田紘彬部長

- ・ 地域おこし協力隊は、熊本県では一つの村で40何名いるところもあり、かなり活用する、しないの差が大きい。県の予算では取り組むのが難しい活動を、国から支援をもらってできるという意味では有効であると思っている。
- ・ さらに自治体ではなく、民間に配置することで、活動のスピード感や自由度が増すということはあると思う。
- ・ 他の委員は分野3についていかがか。

●加藤未希委員

- ・ ニートやフリーターに対する効果的なコンサルティングに関してであるが、私自身もニート経験者である。高校を卒業してすぐ就職し、やりたいことがあった訳ではないが、ちょっとゆっくりしたいということでニートになった。
- ・ 私の場合は、そのタイミングで妊娠、出産、結婚をして、ママになってからやりたいことを探して今のCHERISHを始めたが、ニートやフリーターでも意外とチャレンジ精神旺盛な人は多いのではないかとと思っている。
- ・ ニートやフリーターの中には、自分でやりたいことを見つけられていない、探しているという人もいると思う。地域おこしやまちづくりから、やりたいことのヒントを得ようとする人もいると思われるので、選択肢として提示しておけば、タイミング次第でやってみようという人はいるのではないか。

●須田紘彬部長

- ・ 国ではサポートステーションという機関でニートや引きこもりの方を支援している。
- ・ フリーターを続けている理由によって、対応も変わってくる。例えば、音楽をやりたいからフリーターを選択している人もいるだろうし、非正規雇用の推進によりやむなくフリーターをやっている人もいると思う。
- ・ ニートやフリーターに対する効果的なコンサルティングとなると、基本的にはキャリア・コンサルティングをしていくことになるが、かなり前向きなキャリア・コンサルティング、例えば「がんばろうよ」というやり方だと、対象者が引いてしまうと感じてい

る。

- ・ 対話型で、何が嫌なのかじっくり取り組めるコンサルティングにしなければならないと思うが、そうすると単年度ではなかなか成果が出ないのではないかと考えている。キャリア・コンサルティング以前の、働きたくない人に、なぜ働きたくないのかを話してもらえ人間関係や信頼関係づくりから取り組む必要があり、非常に時間がかかるものと考えている。
- ・ 山名委員、大学生の就業意欲や活動意欲についてはいかがか。

●山名裕子委員

- ・ これしかなりたくないという人もいるが、なれなかったときにどうするのか、また、社会的にイメージされているキャリアを望んでいない人に押しつけていないか、などといった点を考えなければちぐはぐな支援になってしまう。
- ・ 決断しなければいけないが、その決断がなかなかできないだろうし、決断したことを覆してもいいという微妙なところをどのように伝えるのが難しいと思う。
- ・ 引きこもりの若者や、義務教育を終えて働いている若者に対しても、支援や何かできることがあればいいのではないか。

●須田紘彬部会長

- ・ 教育との絡みのある分野だと思う。他に分野3についていかがか。

●武田成史委員

- ・ 県外から秋田の大学に来て、卒業後に故郷や首都圏に出て行く人が多いので、大学生の起業に対してサポートして、積極的に起業させれば、秋田に残る人が増えるのではないか。もし残らなくても、仕事を通じて本県との関係は維持されるのではないか。

●須田紘彬部会長

- ・ 県では過去に大学生を対象とした起業の事業に取り組んだことがあったし、秋田市が大学生の起業塾のような取組を行っているが、必要な事業だと思う。ニートやフリーターからの起業塾のような取組があってもいいと思う。
- ・ 他に御意見はないか。男女共同参画に向けた実現といったあたりはどうか。

●山名裕子委員

- ・ 令和2年度に、県が県民を対象として男女の意識と生活実態調査を行った結果、男性が優遇されていると感じる割合はやはり女性の方が多く、いろんな分野において同様の結果であったが、もっと具体的になぜそう思うのか丁寧に聞き取ることが大事ではないか。
- ・ 学校現場において、小学校は男女混合名簿になっているなど、ほぼ男女変わらない扱い

になっているが、中学、高校、大学でもそのような取組が必要だと思っている。

- ・ 意識調査の中で、子どもを育てるときに男の子に望むのは責任感で、女の子に望むのは優しさとなっているため、家庭での教育や社会的な意識をどのように変えていくのが重要だと思っている。

●須田紘彬部会長

- ・ 学校教育だけではなく、家庭教育や世代間の認識のすり合わせも必要だと思う。分野3について、広く御意見いただきたい。若者や女性が活躍という視点ではいかがか。
- ・ 若者の支援ということで意見を述べる。今、夢が持てない、やりたいことが見えないという学生や若者が非常に多いと感じている。当社で県からの委託事業により、「あなたラボ」という若者支援のプラットフォーム事業を実施しており、やりたいことが明確ではないが何かやりたいという若者に、具体的にやりたいことを探してもらう取組をしている。そこで最初にやることは、自分を知ってもらうことであり、自己決定ということを大事にしている。
- ・ 今まであまり自分で決定したという意識がない方が多く、なんとなくという決断が多いようである。例えば、参加者が休みたいと言った場合には、ぐいぐいと踏み込んで、なぜ休むのか明確になるまで聞いている。そうすると、最初は「少し具合が悪い」と言うので「仕方がないね」と話していても、ぐいぐいと話を聞いているうちに「実は少し気分が乗らなくて」という方が非常に多い。
- ・ そのような方には、気分が乗らないのであれば、最初からそのように言うことを求めつつ、では気分が乗らないのはなぜなのかと聞くと、心理的な負荷がかかることが嫌で、つまり何かを「がんばろうね」ということ自体を避けたいという認識の方が非常に多い。そのような人には伴走してあげることが必要で、「発言しなくてもいいから参加しよう」と声をかけるなど、まずはどのようにしてその場に引っ張り出すかを考えている。
- ・ 今の若者は、心理的なハードルを抱えがちだと感じているので、「参加してもいいんだ」、「発言してもいいんだ」という、安心安全の場をつくることから始める必要がある。
- ・ 起業したいに人に対しては、目的意識を持たせすぎると、それをハードルに感じてしまい、途中でドロップアウトする例も多いので、寄り添う事業の重要性を感じている。
- ・ 「人口減少問題を克服した姿」にも書いたが、他人の目が気になるということが、閉塞感や、自分の意見を言えないということにつながっているのも、もう少し自己決定をさせるという若者への支援ができればいいと思っている。
- ・ 「あなたラボ」という事業はいいことをできていると思うが、起業家何人といった目に見えた成果が出るものではないので、そこは課題と感じている。社会にインパクトやウェーブを起こせるような活動にしていきたいと思っている。
- ・ この他、分野3についての御意見はいかがか。例えば、昨年度は竹内委員がシングルマザー向けの支援などについてお話されていたが、シングルマザーやファザーの方が働き

やすい環境は、イコールで女性が働きやすい、すべての親が働きやすい環境であると言えると思うが、竹内委員そのあたりについていかがか。

●竹内健二委員

- ・ 昨年度は、離婚されて埼玉から五城目町の御実家に戻ってこられて、お花のお仕事をされているという身近な方の事例を中心とした話をした。その方は引き続きお花のお仕事をがんばっていて、生徒が増えて、人気も出てきたようであるが、やはり周りの目が気になるということがあるようである。シングルだから金銭面での支援や保護を受けているのではないかとねたまれたり、「いいわね」と言われたり、といった悩みを聞いている。
- ・ 男女という枠組みは段々と崩れていくのではないかと個人的に思っている。男性と女性の共同参画ということではなく、多様性を認め、生活のスタイルや価値観の違いがあっても協力していく必要があるといった、より広いテーマで解釈しながら施策を検討していった方がいいのではないかと思っている。女性の中でも、私の妻のように子育てに価値を感じていて、楽しくて、ずっと子育てしていたいという人間もいるので、性別だけで画一的な物事のとらえ方をするのは難しいのではないか。
- ・ そもそも問題意識がどこから来ているのか、細分化してとらえる必要があると思う。「社会で活躍したいが子育てが自分の役割になっている」と思う人がいるのであれば、部長が言ったように、なぜ違和感を感じるのかという議論を深め、苦しいという人たちのための施策を展開していく必要があると思っており、このテーマはよりミクロに問題認識と課題設定をする必要が出てきているのではないかと思う。次の何年かの施策を考える時には、ターゲットを絞った方がいいと思っている。

●須田紘彬部会長

- ・ ターゲットのサイドに立つと、気持ちの面もあるので、条件として本人の年齢や、子どもの年齢といったところだけではなく、どのような価値観の方かといったところで細分化されると思う。
- ・ 加藤委員の周りには、子育てに重きを置きたい方、働くことに重きを置きたい方、いろんな人がいると思うが、どのような人がいるか。

●加藤未希委員

- ・ ちょうど先日、CHERISHの参加者で久しぶりに会ったママと話をしたばかりである。その人は、出産して復帰して、夫は普通に働いていて、本人もフルタイムの正社員でバリバリ働いているが、子どもとの時間に向き合えないので、少しゆっくりした働き方にすればよかったと悩み始めているとのことであつた。仕事が終わって家に帰ればバタバタと家事をやって寝るだけで、子どもとの時間が取れていないとのことであつた。

- ・ そのように考える人は結構多く、バリバリ働きたいという方ももちろんいるが、子どもとの時間が今しかないと思えば、子どもが小さいうちは仕事のペースを少し下げるとい
う人が多い。
- ・ 今ちょうど夏休みで、子どもが小学校に入っても低学年のうちは留守番させるのは心配
だし、児童センターはクーラーがないから暑くて大変だし、学童は子どもが飽きてくる
しということで、悩んでいるママが非常に多い。
- ・ 子どもが大きくなってからバリバリ働こうと思っていても、子どもの成長に応じてまた
その時の悩みが出てくるもので、最終的には中学校に入ったくらいで仕事を探し出すマ
マが多いと思う。

●須田紘彬部会長

- ・ パートタイムやテレワークでもキャリアを維持できるような、新しい仕事がつくり出せ
るといいと思うので、そのためには、企業側の業務の切り出しや、テレワークに対応す
るための情報セキュリティの問題も同時に考える必要があると思う。
- ・ 分野2に移る。今議論した働き方なども関係してくるところではあると思うが、どちら
かと言えば、出会いや結婚、出産や子育てという部分についてお話いただきたい。結婚・
出産・子育ての意識や、企業が主体となった取組への支援、法人や地域の団体が取り組
みややすくなるような支援、子育ての環境充実などについて、御意見をいただきたい。

●武田成史委員

- ・ 婚活に取り組んでいると、皆さん初めて会う人たちであるが、やはり人物像が分からな
いとなかなか進めていけないので、お見合いではないが、昔ながらの紹介という形がい
いと思っている。例えば、夫婦で協力して一組の夫婦をつくったら、その紹介してもら
った夫婦がまた別の夫婦をつくっていくという運動ができれば面白いと思う。

●須田紘彬部会長

- ・ 結婚メンター制度のようなものと受け取った。コーディネーターというよりも、身近な
知り合いで紹介するといった形だと思う。

●武田成史委員

- ・ そのような形の出会いに積極的に取り組んだ方がいいと思う。
- ・ 不妊治療に関連して、例えば、20代、30代の女性向けに、卵子バンクのような取組は
できないだろうか。そろそろ結婚したい、子どもがほしいといっても、遅い人が多いの
で、若いうちに卵子を保存しておくといったことは県ではできないのか。

●須田紘彬部会長

- ・ 精子や卵子の提供という話ではなく、自分のものを若いうちに保存しておくということであった。民間でやるべきことか、行政でやるべきことか分からないが、そのような取組も必要という御意見である。

●加藤未希委員

- ・ 前回武田委員が言っていたように、婚活ということを記載しなければ補助金を使えないといったことがあるのかもしれないが、参加者にとっては、婚活と出されてしまうとやはり参加しにくいだろうと、私も感じたところである。
- ・ CHERISHでカフェをやっているが、飲食店でお客さんに対応していると、この人とこの人は雰囲気合うなということが分かってくるので、例えば、飲食店が気軽に計画を立てられて、お客さんに「こういうイベントが今度あるよ。無料で飲めるからおいでよ。」と気軽に声をかけて、お客さんも気軽に参加できるような補助金の形があってもいいのではないか。補助金の申請に対するハードルを少し下げて、飲食店の方が協力して、となれば飲食店の応援にもなるのではないか。

●武田成史委員

- ・ この間の日曜日に開催したイベントでは、補助金の条件としてアンケートの提出が必要であったためアンケートを取ったが、婚活という形にとらわれることなく、例えば既婚者の参加も認める交流会を開催した場合に参加するかという質問に対して、皆さんが参加したいと回答してくれた。
- ・ 私たちの団体では、婚活以外にも交流人口を増やしていこうという取組も行っている。独身の人たちは家と会社の往復だけで、趣味も少ない人が多く、他の人と関わること自体が少ないので、そのような他人と関われる場を作ることが大事だと思っている。結婚に限らず、起業したい人たち同士でもいいし、自分にとって刺激のある人と関わることで、自分の考えや生活、行動が変わってくると思うので、今後は交流会のようなイベントを展開していきたいと考えている。

●須田紘彬部会長

- ・ 確かに、県外からの関係人口だけではなく、県内でも地域を越えた、あるいは地域内での交流人口を増やしていくことは必要だと思う。既婚者がいることによって、「結婚いいな」とか「子どもいいな」という意識の醸成にもつながると思うので、分断するよりも、ミックスして交流を増やすことで、いろいろなチャレンジが生まれることを目指すのは、非常にいい考えだと思う。
- ・ 分野1に進ませていただく。首都圏からの移住促進であったり、リモートワーク、関係人口の促進について、御意見いただきたい。
- ・ 私はとっつきやすい入口が必要ではないかと思っている。本県に関係を持つ人たちが、

本県のどこに問い合わせするのかという、移住相談のところにする人もいれば、各市町村に連絡する人や、場合によっては知り合いを伝って一般の方に行くこともあると思うが、まずは最初に知ってもらうためのスタート地点が必要だと思う。

- ・ 生涯学習センターが運営している、「行動人」という秋田でがんばっている人を紹介しているサイトがあるが、それを参考に、例えば動画のインタビューを掲載するとか、SNSを活用するとか、既存のものでもよりメディアを活用して発信していけば、「秋田にこんな活動があるんだ」と知ってもらえるのではないかな。
- ・ 今日御参加いただいている委員の皆さんの活躍等も含めて、秋田にはこんな人がいると紹介することも必要であるが、一方で、何か成し遂げた人のインタビューだけ掲載してしまうと、とてもハードルが上がってしまうので、普通の人のインタビューも併せて掲載していけばいいのではないかな。魅力を魅力として発信し過ぎると、普通でいいという人が来にくいというジレンマがあると思う。魅力のPRと併せて、普通さを出しつつ、人のつながりを大事にしていく施策があればいいと思うが、皆さんからも御意見をいただきたい。分野1についていかがか。

●竹内健二委員

- ・ 今、うちの法人で取り組んでいることとして、月額44,000円で全国の空き家に住み放題という多拠点生活を支援するサービスに、五城目町の空き家を一軒登録している。その会員が、全国の中から「秋田県五城目町か、行ったことないな。ちょっと行ってみよう。」とサービスを利用して来てくれるのであるが、本県内の登録施設は五城目町と、JRが運営している角館の2施設だけだと思う。
- ・ このサービスの登録施設の運営を、民間だけでやるのではなく、自治体と連携するやり方もあると思う。本県には魅力的な場所、地域、食などがたくさんあるので、少なくとも各自治体に一軒ずつぐらいは施設を用意して、まずは秋田県に来てもらい、知ってもらうことが大事だと思っている。
- ・ そういった施設に人が出入りしていると、地域のおじいさん、おばあさんたちも気になって、交流が生まれることで、思い出ができ、いい印象が残って、「秋田にもう1回行こうかな」とか、「こんなことがあってよかったよ」という口コミが広がっていくと思うので、自治体ができることを調査の上で取り組んでみてはどうだろうか。

●須田紘彬部会長

- ・ 協業型のサービスが重要だと思っていた。竹内委員の御意見にあったサービスも、登録するだけではお金がかからず、利用者があった時にサービスの運営会社を通じてお金が入ってくるという形である。従前は、登録や掲載だけで負担が発生していたが、今後の協業型サービスは登録自体には負担が発生せず、利用者があった場合に双方にお金が支払われるという形で、非常に増えてきていると感じている。

- ・ こういった賃貸や宿泊の協業型サービスを、ワーケーションやテレワークの場所として開放していく、関係人口として来てもらう、もしくはコロナの隔離の場所として使ってもらうといった推進の仕方があると思う。利用が増えることで、関係人口が増えて、地元にもお金が落ちるといった協業型のサービスは非常にいいのではないかな。
- ・ コワーキングスペースにも協業型サービスがあり、私の会社でも登録をしている。コワーキングスペースや宿泊、その他にも協業型サービスはあるので、推進できればいいと思う。
- ・ 分野1について他に御意見いかがか。

●武石一之委員

- ・ 秋田に帰ってくる前に10年以上、東京で暮らしていたが、秋田の情報は意識していないと全然入ってこなかったの、広告戦略が全然足りていないのではないかな。もっとお金をかけてアピールするべきではないかな。
- ・ いろんな価値観があるので、ワーケーションを取り込むことは可能だと思うが、リモートワークを活用した移住・定住にはなかなか結び付いていかないのではないかなと思っています。
- ・ 首都圏企業の県内誘致に関連して、秋田の魅力は土地の安さや低賃金という部分であり、労働力確保という観点では効果があると思われるが、首都圏の企業がジョブ型人事制度を検討し始めており、同じ職種であればどこに行っても同じ賃金ということになるかもしれない。そうすると、地方拠点とする優位性が薄れてしまい、厳しい状況になってくると思われる。
- ・ リモートワークの今後の動向を考えると、秋田にしながらリモートワークで県外の企業に勤めるという時代がすぐそこまで来ているので、県外の企業を斡旋するなどの活動も一つの手だと思っている。そうすることで、法人税収入は増えないが、所得税は増えていくのではないかな。

●須田紘彬部会長

- ・ 企業誘致により法人をつくってもらうよりも、働く人を増やすという観点の御意見であった。他に分野1で御意見はいかがか。

●竹内健二委員

- ・ リモートワークには可能性があると思うが、独自の切り口でターゲットにアピールすることも大事だと思っている。例えば、五城目町には五城目城という城があるが、今のところまったく活用できていないので、歴史おたくや城が大好きだという人向けに、城の中でリモートワークができるように環境を整備しても面白いのではないかな。田沢湖だったらクニマスのように、趣味や関心事で切り口を作ることによって「あそこに行ってリモート

ワークしたんだ」という人が増えれば面白い。

- ・ 面白さはとても大事な要素だと思っており、普通の便利さや快適さで競争するのではなく、秋田ならではのマニアックな切り口とリモートワークを掛け合わせてみると、「馬鹿だね。でも面白いね。」という提案ができるのではないかと思っている。さらに進んで、そのような人たちが秋田を聖地として扱うようになれば、関係人口も増えてくると思う。

●須田紘彬部会長

- ・ 趣味、関心事に訴えるということで、鉄道、コスプレ、アニメなど、大多数ではないかもしれないが、かなりコアな人たちが熱狂的にわざわざ足を運んでくれるコンテンツを考えてみては、という御意見であった。
- ・ 他にこの分野 1 について御意見はいかがか。

●加藤未希委員

- ・ 私はずっと秋田に住んでいるが、秋田に住んでいるからこそ、当たり前になってしまっただけで秋田の魅力に気付かず、県外から来たママの方が、私よりも秋田の魅力を知っているということが多い。例えば、当たり前にもふらっと海に行けるし、雪が降ればスキーやスケートもできるし、山にも行ける。「これはすごいことなんだよ」と言われて気付かされる。他のお母さんが子どもを連れて遊びに行ったことを、SNSやInstagramに上げているのを見て、「ここはどこ」となることもある。
- ・ 秋田に住んでいる地元の人がまず秋田を知ることが大事だと思っており、秋田県民が秋田を自慢して、魅力をどんどん発信することで、県外の人や県外に行った人たちにも伝わるのではないかな。
- ・ 今般、コロナの影響によっていろいろな助成などがあり、県内で宿泊などをする機会が増えているので、ママたちがSNS等で発信しているのを見る機会も増え、今まで知らなかったことを知ることができている。
- ・ 例えば、秋田の魅力をSNS等で発信しようという取組を実施することで、県民みんなが秋田の魅力を発信し、さらに魅力の発信に協力してくれた人にはプレゼントが当たるといったインセンティブを用意するのもいいのではないかな。
- ・ 秋田に住んでいる人が秋田をいいと思うことが一番の近道だと思っている。そういった情報を県外の人に見てもらえば、行ってみたいと感じてもらえるのではないかな。

●須田紘彬部会長

- ・ まだ御意見、御質問があると思うが、予定していた時刻となったので、意見交換は以上とさせていただきます。事務局から何か連絡はあるか。

□事務局

- ・ 第3回の部会については、追って正式な通知をお送りするが、9月1日（水）に開催し、場所は県の秋田地方総合庁舎6階の総607・総608会議室を予定している。
- ・ 予定している議事は、事務局で作成した提言書案を提示し、御意見を伺いたいと考えている。提言書案は部会でいただいた御意見をもとに作成するが、部会の限られた時間では話せなかった御意見があると思うので、後日、電子メールでも委員の皆様に御意見を伺う。
- ・ 引き続き、こういう資料がほしいという場合も、事務局に御連絡いただければ準備する。

●須田紘彬部会長

- ・ 委員の皆様から何か連絡等はあるか。
- ・ 進行を事務局に戻す。

□事務局

- ・ 熱心な御審議をいただき、感謝申し上げます。
- ・ 以上をもって、令和3年度秋田県総合政策審議会第2回ふるさと定着回帰部会を閉会する。

以上